なぜ「春・夏・秋・冬」と言うのか?

- 春・夏・秋・冬の語源は、古代人の自然観(神への信仰)を考えると分かり易い

- 日本人の神様への信仰は宗教的なものではなく、「自然や生命への畏敬の念」

- 日本人の自然観は人が自然をコントロールすると言うのではなく、人と自然が共に生きると言うもので今日的に言うエコロジーな考え方である

春

- 春は、木の芽や花の蕾がふくらんで「張る」ことからハル
  すなわち「草木が一斉に芽を吹く状態」が春(ハル)

夏

- 泥む(なずむ) -- 難渋(なづみ) → ナツ

  なづみは、水・雪・草などに足腰を取られ前に進むのに
  「苦労する(難渋)」するという意味

  古代人は、稲が育つ季節には雑草が生い茂って抜く作業や
  害虫が大量発生して駆除するのに難渋した

秋

- **空が天高く開いたようになる(開く、空く、明く)→ アキ**
- **秋は実りの季節で、色々なものが「飽く(満)」→ アキ**

商人(ｱｷｳﾄﾞ→ ｱｷﾝﾄﾞ)は秋(ｱｷ:満ちて取れたもの)を売る人のことで、秋には人が集まり色々な収穫物々交換(ｱｷﾅｲ)した

冬

- **増ゆ篭り(ふゆごもり) →「増ゆ」が「篭る」→ フユ**

「増ゆ」とは、種子が蒔かれ収穫されて増えていくこと
「篭る」とは、種子が蒔かれるまでじっとしている状態

なぜ春一番の植物の花は黄色が多い？

フクジュソウ、タンポポ、ロウバイやマンサク、レンギョウなど黄色が多い

これは、春先にまわりがまだ枯れ葉色で、樹冠が青空に透けて見える環境のなかで、黄色が、花粉を運ぶハエやハチを花に誘引するのに、一番効果的な色だかららしい

ちなみに、夏は、野山でもっとも目につく**ノリウツギ**など、白い花が多く、秋は紫や赤など色とりどり秋の七草も、キキョウ、ナデシコ、ハギ、クズ、フジバカマなど多彩